

出版随想録 平成十七年八月十五日

## 「えぞつづ」の人々 たなか踏基

文芸社の企画部に勧められ、私は「奇妙な」のシリーズ化を密に狙っていた。今回の著作は、いわばその第二弾ともいべき作品である。

一人の彫刻家の生きていた存在の重さを描く書下ろし「奇妙な猫たち」、昭和三十八年豪雪を背景にした併載「新雪国幻想」、二つの意欲的な短編を文芸社から上梓することができた。

「奇妙な猫たち」では、「石の詩人」と囑望されながら、従来作風と敢えて異なる二体の石の十一面観音菩薩像を彫って逝った、安曇野生まれの苦惱する一人の芸術家を描いた。安曇野を現地取材して書上げた。猫という動物の奇妙な生態と、安曇野の風土や自然が織成す素晴らしいを詠込み、読者に届けたいと願っている。

「新雪国幻想」は、リメイク作品で、雪女郎と雪蛇を登場させ、三八豪雪の惨禍の中で過ごす少年の妖しい空想を描いた。オリジナル作品「雪」は、私の想い出深い作品で改稿を重ねている。新潟県中越地方は、地震や水害に見舞われ復興の途上にある。半世紀前の長岡教育放送局の逸話が、復興の一助になれば幸いである。

ノン・フィクション的手法を駆使したので、作品中の登場人物や場面に、似た場面や描写が仮にあったとしても、全て作者の創造の産物であることは断るまでもない。果たしてそれが、二つのテイストの異なる作品共に、フィクションの世界と融合し、相乗効果を産出することに成功しているか否かを、読者一人一人の忌憚なきご意見としてぜひ聞かせて欲しい。

今年の二月、文芸社より信州松本舞台の「奇妙な喫茶店」を上梓した。動機は、二

人のマニエから刺激を受けたからである。一人は老舗の瓦屋の社長、優れた群馬の山岳写真家で、もう一人は最近3rd MANUを発売し活躍の Singer Song Writerであった。

拙著「奇妙な喫茶店」は、一部地域で予想外に好評だった。松本中心の中南信地域である。企画頭書から、文芸社の方々から助言情報を得たことも大変嬉しく、感謝の他はない。NHK TV 長野局が、番組のイブニング信州で拙著の書籍ランキング6位を報道した。これには正直いつて驚いた。好評理由は、友人の某大手監査法人理事長が、郷里松本を愛する知人に働き掛けてくれたのが端緒となった。この友人の働き掛けが無かつたら、次作品執筆の筆力も鈍っていたと思う。この友には本当に感謝している。

私のホームページに、その後沢山の感想や励ましのメールを戴いた。此処では、謹呈書籍に寄せられた、親しい友人・諸先輩たちのメールや手紙の一部を、抜粋して再録してみたい。

《特急「あずさ」に恵贈書籍を携行し、松本駅到着前に読み終わっていました。信州、松本・トンボ祭、ジャズ、「まるも」、そして城山・完璧にあの時代の『吾』に戻りました。もっとも、私のジャズは横浜ではなく新宿で、「きーよ」や「ヨット」でブルーノートを、「プレス・テージ」「サボイ」でイーストコーストを聞きまくるものでした。ライブの記憶は余りなく、マイルスやジャズメッツェンジャーズの初来日を厚生年金で聞いた感動が懐かしいです。という訳で、その夕方何十年振りかで喫茶店「まるも」に寄りました。壁にモジリアーニの絵は無かつたけれど、殆んど昔のままで、オーナーのジュニアがコーヒーをいれてくれました。お父さんも元気の由。少しばかりの伝手もあつたので、

鶴林堂に人を介してお願ひし、社長に販促書店となつてくれる了解を頂きました。文芸社とは近い関係にあり、確実に注文し、内容も理解の上相応の陳列をしてくれるそうです。なお十冊程私に送ってください。松本をこよなく愛する人達に贈呈して宣伝してもらいます。今朝の松本は零下5、長野駅は20分の雪、東京の暖かさに驚いています。以下取急ぎご報告まで。》

《小池光氏の序文はすばらしい文章です。わがごとくように嬉しく存じます。思い掛けない人との出会いは、いくつかの偶然によつて、起きるのかもしれないが、それは決して単なる偶然の出来事ではないような気が致します。それは常に創造活動や真理探究をめざして努力する人に与えられる特別なご褒美ではないかと思ひます。いつまでも若々しい気力をもちつづけて、行動していこうではありませんか。今回の出版のこと本当によかったです。》

《時に何処か寂しげで空想的な印象のあの上司が、二足の草鞋を新たに履いたのですね。甘く切ないのに、妙に写実的な小説の出版に先ず乾杯を捧げます。本書を読んで、技術一徹であつた時でも文学の才能をかいま見えたことが今にして沸々と思ひ起こすことが出来ました。数多くの知人とその交流、数々の科学雑誌への投稿、驚嘆するパイプレスプラントの発想など、将来を見据えた着想と広範囲な活動に何か惹きつけられるものを思ひ出します。文学を学び、科学を知り、相反するものを新たなDNAで融合させた小説には驚きと新鮮さを覚えます。束の間であつた石化時代に浮かされた多くの技術者の中に、吾を見失うことなく、日本人は日本人らしく、足元を見つめ、そしてしつかりと将来を見渡せる先輩であればこそその本書である。》

《さて、貴兄が各方面において類稀な才能に恵まれ、活動されてこれたことは、小池さんの序文を読むまでもなく誠羨ましい限りです。人生の区切りとして出版に踏切られたことも情熱の証と感嘆致します。小説からは高校時代に対する郷愁というか、こだわりの深さを感じます。短歌の古語の使い方に違和感を覚えつつも、微妙な息遣いの面白さがあるなど思っております。更なるご健筆を。私自身は、非才を嘆じつつもその後の俳句の勉強を重ねて降ります。》

《本患贈戴き有難うございます。貴君の文才については不幸にして知らず驚いています。月末まで多忙で余裕が無いので、月末に読むのを楽しみにしています。何はともあれ、早速ラック・セブンの七冊を購入し知人に配布致します。二月に入ってから、貴君の都合の良い日に北上尾PAPAの例の居酒屋で祝杯を挙げ、その折に貴君から引き渡して戴くという案は如何でしょうか？厚かましいですか？》

《三月にしては寒い日がここ信州では続いておりましたが、この頃は少し暖かくなつて、お彼岸を迎えました。一ヶ月程前、お姉さまより踏基さんのことお聞きしてびっくり致しました。お姉さまとは、もう五、六年も一緒に俳句でおそんでおりましたの。丁度、俳句のお仲間の句集出版の祝賀会の折に弟さんが踏基さんとお聞きして、しばらくして「奇妙な喫茶店」のご本を戴きました。出版されて間もなくの時でした。一見、漢字は多いし、字は小さいし、何だか読みにくそうな印象でしたが、読みはじめましたら面白くて憑かれたように読み終わりました。「松本」「まるも」「梓川」「松本電鉄」「新島々」等、私の住んでいるこの周辺が舞台なのでとても身近に感じ乍ら読みました。何でもずいぶんお若い時に書かれた小

説ということ、やはりすごいなアと感服致しました。これから何人かの友達にまわして読んで戴こうと思っております。またおもしろい小説を出版して下さいませ。楽しみにしております。では御身体お大事になさって下さいませ。》

全国配本はやはり荷が重かった。

所詮素人作家、全国的な知名度の低さはどうしようもなかったからだ。それでも、松本の鶴林堂書店と上尾の高砂屋書店の両書店さんには、積極的に支援して戴いた。特に上尾の某氏は、店頭平積み販売のみならず、店中央柱に地元作家の特別コーナーを設け、支援を継続してくれた。「次作も必ず店頭に平積みします」「口約束ではあるが、この言葉は実に嬉しく励みになった。他にも、地元のダンス教室やスポーツ倶楽部の読書好きの仲間に、お世話になり感謝している。

版元から僅かであるが、印税が入る知らせを受けた。気を良くし、次作品の執筆に着手した。安曇野舞台の書下ろし「奇妙な猫たち」、高校級友の某彫刻家の話百四十枚、余勢でリメイク作品「新雪国幻想」豪雪テーマ百枚を一挙に脱稿した。地元文芸誌用と自分のHPに掲載の随想録を加えると、二ヶ月余りでゆづに三百数十枚の原稿用紙の枱目を埋めた計算となる。私は定年まで一貫して、技術屋で飯を喰った身である。然も文学の実作は、十代、二十代前半で約半世紀前に過ぎない。エネルギーの噴出が、何処から発生したのか我ながら不思議であったが、稚拙な同人誌「えぞうぶ(リソップ)」に原点があるをやつと最近気付いたのである。私は、七月に次作「奇妙な猫たち」取材を兼ねて久々に松本に行く機会を得た。拙著「奇妙な喫茶店」上梓の際に、茶房「まるも」

オーナ新田貞雄氏、配本の鶴林堂書店他の人々にお世話になったので、直接ご挨拶しておきたかった。更に加えて私の松本行きには、二つの目的があった。ひとつは高校四十五年振りの同期会参加、一つ目は、昔の同人雑誌「えぞうぶ」復刊の相談である。

高校時代一年休学した私にとって、唯一無聊を慰める場所が茶房「まるも」であった。今回は特に、三十歳も年齢の離れた旧知の友同志の弾む会話で、私は時の経つのも忘れていた。新田老は、松本市の文化活動の生き字引的な存在の人である。黒眼鏡は弱った視力のためであるが、九十歳を全く感じさせない程お元気であった。半世紀も変らぬ奇妙な人である。茶房「まるも」はクラシック音楽と松本民芸家具の喫茶店として、人々に御馴染みであるが、あの場所でアルゼンチンタンゴの曲が鳴り、まして新田老が、タンゴを踊った人と、知って居る者が果たして何人いるだろうか。今度来松の折にはぜひ、「まるも旅館」に泊まってくれと懇願された。正に「奇妙な喫茶店」の奇妙な老人である。

初参加の同期会は、松本里山辺美ヶ原温泉郷のホテル翔峰で開催された。半世紀ぶりの出逢い、最初殆ど素性が判らなかつたが、臍気な記憶が甦ると高校時代の顔が浮んできた。拙著については、書名を知っていても、私の執筆と知る者は極一部に過ぎなかつた。

昔の同人誌「えぞうぶ」の執筆者は、高校時代の文学部、新聞部、交友誌所属の当時生意気盛りで、現在消息が判明しているのは、久保田喜正、高橋昭一、守屋義雄、吉田邦幸、同人ではないが女性寄稿者、不肖私の六人である。松本にいる、二人の仲間の復刊の意向を聞き、感触を知りたかつたのである。同人誌の表紙を描いた、画家・絵本作家の

